令和７年度　髙尾看護専門学校自己点検・自己評価結果報告

１．令和７年度　自己点検・自己評価結果

令和７年度の自己点検・自己評価は、「専修学校における学校評価ガイドライン（文部科学省）」に基づき、教員を対象として実施した。評価基準を令和７年度より５段階評価とし、その結果が視覚的に見え、取り組むべき内容を抽出しやすいように変更したため、前年度比較ができない。

以下、カテゴリー別に評価結果の概要、現状の取り組み、評価に影響した要因の分析、各課題について整理する。

表１　評価基準

非常によく当てはまる（5）100～80 以上	：S	達成度が高い
よく当てはまる（4）80 未満～60 以上	：A	ほぼ達成している（明らかな改善は要しない）
やや当てはまる（3）60 未満～40 以上	：B	達成がやや不十分である（若干の改善を要す）
やや当てはまらない（2）40 未満～20 以上	：C	達成が不十分である（明らかに改善を要す）
当てはまらない （1）20 未満	：D	未達成　（早急な改善が必要）

表２　令和７年度　自己点検・自己評価結果　評価点/５点満点

評価項目	令和7年度
Ⅰ教育理念･目的･目標	3.5
Ⅱ教育課程	3.7
Ⅲ教育体制	3.5
Ⅳ教育活動	3.6
Ⅴ学生生活への支援	4.0
Ⅵ組織･管理運営	3.0
Ⅶ施設設備	3.5
Ⅷ学生の受け入れ	3.2
Ⅸ卒業生の状況	3.2
Ⅹ社会への貢献	2.8
Ⅺ研究･研修活動	2.2
Ⅻ.学校評価	3.0

２．カテゴリーごとの総括評価

１．教育理念・目的・目標

【評価】10 項目の平均得点は 3.5 点であった。

本校は設置主体の理念をもとに、地域の保健・医療・福祉の担い手として社会に貢献できる人材の育成を目的に設置された。また、本校の使命は、地域社会との繋がりを通して看護に関する幅広い視野と豊かな人間性を兼ね備えた社会に貢献できる看護師を育成することにある。教育理念・教育目的を具体化した育成人材像を、「自律・信頼・探求心」を身につけた看護実践者とし、これらのキーワードを学校玄関ホール、学生便覧、実習要項、学校案内、ホームページ等で公開し、学生・保護者、学校関係者、地域に周知している。

教育目的・目標は、自己点検・自己評価の際に確認し、教育活動の改善を図っている。

卒業時の到達状況の分析結果を教育活動にフィードバックする点においては、平均点以下であり、教育課程・教育体制・教育活動の評価と関連づけ、方策を検討していく。

＜今後の課題＞

１．目的・目標と卒業時の到達状況分析を教育活動にフィードバックする方策への検討

Ⅱ　教育課程

【評価】12 項目の平均得点は 3.7 点であった。

教育課程は保健師助産師看護師学校養成所指定規則の規定に則り、看護学の内容・求める学習の到達および学生の成長発達について明確な考え方と根拠をもって編成している。

教育課程に基づき、教育理念・目標に合った順序性で科目を配列し、教育目標と科目間の関連性を明示したシラバスを学生に毎年配布している。このシラバスを用い、入学と進級時に教育課程編成の意図や学習進度・学年目標・科目目標との関連性について学生へのガイダンスを実施している。これにより学生は自身で学習の流れと意義が確認でき、授業準備ができている。教員・外部講師もシラバスに沿って授業・評価の一貫性を保つよう共通理解をしている。

教育課程の見直しについては、教員の意見反映の場として教育課程編成委員会・教務会議を設定し、検討し合うことで、次年度のシラバスに反映している。外部講師においては、年度 1 回の講師会議で意見交換を実施しているが、会議の出席率が低いこともあり、十分とは言えない。授業で来校時に講師から個別に意見をもらい、教育課程の見直しに反映する必要がある。

＜今後の課題＞

１．外部講師の意見を反映した教育課程の見直しの検討

Ⅲ　教育体制

【評価】15 項目の平均得点は 3.5 点であった。

教員の専門性が発揮できるように、専門領域を軸とし、担当科目・時間の配分に配慮している。科目を担当する外部講師についても実習関連施設の医師・認定看護師・管理栄養士などその分野を教授するのにふさわしい方々を配置している。科目ごとの授業については、シラバスを基に教授内容の依頼と確認を行っている。

臨地実習は、教育目的達成に向けての重要な科目であり、学修成果の向上を目指して実習環境を整えている。実習施設での教育体制については、実習指導者会議を施設毎に設け、実習に関する直接的な協議や説明を行い、実習中は実習指導者と担当教員が連携しながら指導を行っている。各科目の実習終了後には授業（実習）アンケートを実施するとともに、年度末には実習まとめの会議を行うことで、領域を単位とした協力関係を強化し、次年度の実習体制に反映させている。

教員の教授活動については、科目単位で授業アンケートを実施し、教員自身で教育活動に活用できる体制を整えている。しかし、効果的な教育方法についての検討の場が少なく、新任やキャリアのある教員間で切磋琢磨できる体制を整える必要がある。新任教員については、先輩教員が指導を行いながら教育活動ができるようにしている。

国試対策については、入学時からの看護師国家試験を見据え、国家試験学習委員を学生から選出し、クラスの意見・要望を尊重しながら学習環境の整備・学習活動の提案・実施・評価を行っている。学年別の国試ガイダンスでは、合格までの道のりと具体策を示すことで、学生が学習継続の主体となるよう働きかけている。また、個人目標シートを活用したチューター面接を年４回計画し、学習面における個別支援を行っているが、国家試験の合格率は前年度より低下しており、より個別支援体制への再構築が最重要課題である。

＜今後の課題＞

１．効果的な教育方法検討の場の設定と教員の教育力を高める体制の強化

２．学生が国家試験に合格できる支援体制の再構築

Ⅳ　教育活動

【評価】13 項目の平均得点は 3.6 点であった。

シラバスには科目のねらい、授業目標、ディプロマポリシーとの関連性、評価方法、授業内容と成果、授業目標の達成に応じた授業形態を明確に示し、教員と学生の共通理解に資する構成になっている。新カリキュラムの運用に伴い、アクティブラーニングやグループワーク、学生によるプレゼンテーション活動など学生が主体的に考え、学習する授業形態を多く取り入れることで、教育目標である「自ら学び続ける力を身につけることができる」の育成を図っている。

実習に関しては、教育課程における各実習の位置づけを明確にし、毎年実習要項の見直しを行って内容の充実を図ったうえで、実習病院との連携強化を継続している。実習評価にルーブリック評価を用いたことは、学習者の成長を支援するための重要な手段となっている。学生と指導者・教員間で評価の観点や尺度が明確となり、学習者は自己の目標や課題を意識し、自律的に実習に臨むことができている。また、共通の基準での評価が可能となり、公正な評価から効果的な指導ができるようになった。

教材研究に関しては評価点が平均以下となった。専門領域における臨床経験や教員経験年数の差異が教育活動への自信に影響していると推察される。また、教材研究が進まない要因の１つとして評価と関連づけ、教員が自身の教育活動を振り返る体制が不十分であることが挙げられる。今年度は、教員が集中して教材研究できるよう業務中に自己研修日・時間を自由に取得できるようにしたが、取得する教員は一部であった。多重業務の中での時間確保が難しいことも要因として挙げられ、今後、授業改善に取り組む体制を整えていくことが課題である。

＜今後の課題＞

１．教育目標到達を支える教育活動の継続

２．教材研究への理解を高め、教員の教育力向上の継続的支援

Ⅴ　学生生活への支援

【評価】11 項目の平均得点は 4.0 点であった。

本校では、学生が安心して学業に専念できるよう、経済的支援、健康管理・学習支援の整備に努めている。スクールカウンセラーの配置に加え、近隣病院での健康診断と校医を配置し、心身の健康管理体制を構築している。経済面では、実習病院である嶋田病院の奨学金制度のほか、公的奨学金制度の相談・手続きを行っている。

２年次の７月には就職ガイダンスを行い、自己の進路実現のために早い段階から活動することを勧め、１２月には近隣の実習病院に依頼し、就職説明会を行っている。

加えて、チューター面接を年 4 回行い、学生の学習面だけでなく、心理面・社会面といった多方面から学生の困りごとに対応している。令和７年度において中途退学者は１名のみであり、これらの多角的な支援体制が効果的であったと評価する。また、合理的配慮が必要な学生支援として本校においてのガイドラインを作成し、令和 7 年度の学生便覧では「合理的配慮ガイドライン」を明示、学生に周知する取り組みを行っている。

＜今後の課題＞

１．学生生活への支援体制の継続

Ⅵ　組織・管理運営

【評価】19 項目の平均得点は 3.0 点であった。

運営方針については、前年度の評価をもとに、社会に貢献できる「自律・信頼・探求心」を身につけた看護実践者の育成という教育理念・教育目的の達成に向けて、一貫した方針・具体的方策を揚げ運営をしている。組織運営に関する情報収集や参画意識については、教職員間で十分とは言えない状況がある。今後は、学園本部との連携を強化し、学校運営に関心をもって取り組む意識の醸成が必要である。

また、教務会議では、自由な意見交換の場は確保されているものの、ボトムアップで検討すべき事項と、トップダウンで共有すべき事項の整理も今後の課題である。今後は、各会議での役割分担及び役割理解についても、教員間で明確にして共通理解を図り、適切な学校運営体制の構築に努めていく。

18 歳人口減少と大学での看護師養成が進むなか、定員割れが続き、令和 9 年度以降の学生募集を中止した。在校生に関しては、社会に貢献できる看護師の育成という看護師養成所としての社会的使命と役割を果たすとともに、 これまで通り教育環境を維持し、学生生活や国家試験対策、進路・就職支援等、教職 員一同で責任をもって全力で取り組んでいく。

＜今後の課題＞

１．学園本部との連携を強化し、学校運営に教員が関心をもって取り組む意識の醸成

２．在校生に対し、看護師養成所としての使命と役割を果たす

Ⅶ　施設　設備

【評価】14 項目の平均得点は 3.5 点であった。

施設・設備・教育用教材教具等は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則により整備し、教育目的の達成を目指し、知識・技術の両面から実践力を育てる環境となるよう充実を図っている。高機能シミュレーターや各種モデル人形を活用する演習については、シラバスに明記し、より臨地に近い学習環境を整えることで、学生が関心を持って授業に取り組むことに繋がっている。

施設・設備の管理は、学生が安全で快適な学校生活を送れるように、年２回の安全点検を実施し、改善箇所のメンテナンスを行っている。また、防災規定に則り災害時を想定した防災訓練を年 1 回以上実施し、人命の安全と被害の軽減を目的とした安全教育を行っている。今後は、看護師を目指す者として、災害看護の視点を踏まえた防災訓練のあり方を考えていく。

＜今後の課題＞

１．定期の安全点検と整備の継続

２．災害看護の視点を踏まえた防災訓練の導入

Ⅷ　学生の受け入れ

【評価】7 項目の平均得点は 3.2 点であった。

令和 6 年度入学生の状況を踏まえ、入試委員会で受験生確保の検討を継続した。ホームページ、SNS（ネット媒体）を使用して情報発信を行い、学生募集要項は九州・沖縄、山口県の高等学校（通信制を含む）、福祉系の専門学校等に発送するとともに、西鉄メディアボックスへの学校案内を設置、進路ガイダンスに参加し、広報活動を継続・強化した。オープンキャンパスでは、在校生、卒業生の協力のもと学校の特徴や看護体験、学生との交流を行った。しかし、オープンキャンパスの来場者の減少に伴い、入学生も減少した。減少の要因は、多くの人の情報収集のツールである SNS での情報発信が弱いこと、学生への経済的支援制度が不十分であることが挙げられる。

入学選考は、学則、規程に沿って実施し、面接では昨年より集団討議を導入しているが、受験後の問い合わせが生じ、募集要項への面接内容の明示が不十分であった。学生受け入れに関しては課題があるが、令和 8 年度入学生 10 名を最後に、令和 9 年度より学生募集は中止となる。

Ⅸ　卒業生の状況

【評価】9 項目の平均得点は 3.2 点であった。

令和 7 年度の就職・進学に関しては、就職希望者の卒業時内定率は 100%、助産師学校進学が 1 名であった。しかし、近年の傾向として就職を希望しない学生も数名おり、進路が多様化している。

卒業時には教育目標の到達度、看護師に求められる看護実践能力と卒業時の到達目標、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の評価を行っている。

資格取得では、全員合格を目標にしているが年々合格率が低下し、全国平均を大幅に下回っている。学生には、１年次から国試合格を意識させ効果的で一貫した国試対策を組んでいるが、教員の配置状況や力量に依る現状があり、組織としての脆弱な支援体制が合格率低下に影響している。また、３年次の実習終了後の国試対策の出席率低下から、学生のニーズを十分汲み取れていないと推察される。集団や個別など、柔軟な支援方法の工夫が必要である。国家試験不合格者に対しては、再チャレンジのための継続した支援を行う。

看護師養成所としての使命と役割を果たしつつも、学生のニーズに合った支援が今後は求められる。

＜今後の課題＞

１．学生のニーズに合った進路支援の強化
２．教育実践力の向上
３．学生のニーズに合った国試対策強化と全員合格
４．国家試験不合格者に対する支援

Ⅹ　社会への貢献

【評価】5項目の平均得点は2.8点であった。

本校では、福岡県看護教員養成講習会や環太平洋大学専任教員課程の受講生を受け入れ、演習講師として協力している。また、日本看護学校協議会のキャリアアップ研修の受け入れ等も行い、副校長はじめ、専任教員は社会貢献に寄与する活動を行っている。

学生においては、毎年１年生に小郡市の認知症サポーター養成講座を受講させ、地域の看護学生として学ぶことが、地域貢献の一つに繋がるという意識を高める機会となっている。また、学内のボランティア活動としてオープンキャンパスでは、来場者に対し学生生活の説明や看護技術の披露など、活発に関わる姿がある。その他、地域からの要請に可能な限り応え、学生個々の活動、学校としての活動を行っている。これらの活動を通して学生は様々な学びを得ることができ、大きな教育的効果となっている。

＜今後の課題＞

１．地域・社会の要請に応じた社会貢献活動の継続

Ⅺ　研究・研修活動

【評価】8項目の平均得点は2.2点であった。

教員の資質向上のための研修は、年間計画を策定するとともに、必要な研修については随時受講させているが、研修への取り組み方や教育活動への活用については個人差がある。受講後は、学内において伝達講習を行い研修内容の共有を行っている。

学会参加については、一部の教員が日本看護学校協議会に参加しているが、教員の専門性に合わせた学会参加はできていない。また、研究活動については、多重業務の中での研究時間の確保が難しく実施できていない。今後、研究・研修活動に取り組む体制を整えていくことが課題である。

＜今後の課題＞

１．研究・研修活動への理解を高め、取り組み体制の整備

Ⅻ　学校評価

【評価】7項目の平均得点は3.0点であった。

本校では、学則に基づき自己点検・自己評価を毎年度行い、毎月開催する教育課程編成委員会にて協議し、学校運営、教育活動の改善ができるよう努力している。

自己点検・評価を次年度に活かし改善できているかについては、毎年教員の入退職があり十分な改善に至っていない現状である。確実に改善ができるよう実施体制を整えていくことが課題である。

自己点検・自己評価の結果については、毎年３月、６月に学校運営報告として理事会及び評議委員会で報告している。第三者による評価については、令和８年度以降に実施予定である。また、自己点検・自己評価結果の公表については、本校にて閲覧できるようにしている。

＜今後の課題＞

１．自己点検・自己評価結果を取り入れた改善実施体制の整備